大学出版

The Association of Japanese University Presses

No.139
2024.8
夏

[特集] **いまこそ、学食!!**

学食改革素案　**藤原辰史**　1

学生に食を提供しつづけて
——生協食堂の取り組み　**大築 匡**　6

偶然をつくる食堂
——ダイニングラボ・食堂コマニ　**川添善行**　12

「学食」をデザインする
——学生視点を取り入れた共働プロジェクト　**安藤拓生**　17

[連載] **何年経っても忘れられない、編集者の一冊《14》**

田中佑実著
『死者のカルシッコ——フィンランドの樹木と人の人類学』
川本 愛　表2

大学出版部ニュース　23

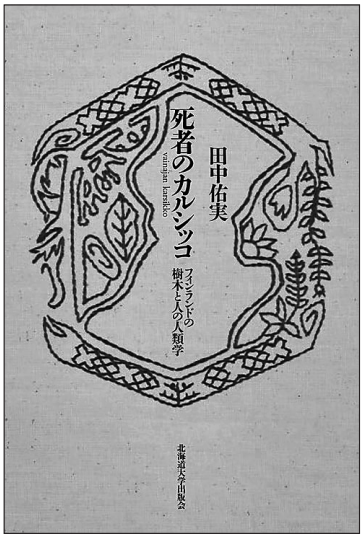
一般社団法人
大学出版部協会

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

何年経っても忘れられない、編集者の一冊《14》

田中佑実著『死者のカルシッコ――フィンランドの樹木と人の人類学』

川本　愛（北海道大学出版会）



カバーデザインには、著者の田中佑実先生が本書のために制作した刺繍を使用。カレリア地方の伝統的な刺繍をリスペクトしつつ、人間と樹木が混ざり合う様子を表現した。刺繍された布のサイズとカバーのサイズがそのままでは合わなかったので、刺繍部分と背景の布を印刷会社で撮影・合成してカバーデータを作成した。
装幀：須田照生、印刷：アイワード、製本：石田製本［北海道大学出版会・2023年／四六判上製・244頁・定価6380円］

「死者のカルシッコ」は、亡くなった人のイニシャルや生没年などの印を樹木に刻むフィンランドの風習である。著者の田中先生が二〇一六年にカルシッコについてのフィールドワークを計画したとき、この風習はフィンランドにおいてすでにほとんど行われておらず、フィールドワーク受け入れ先となるヌーティネン家を含めた一握りの人たちだけが個人的に行うものとなっていた。本書はヌーティネン家での長期滞在をもとに、「樹木」「死者」「生者」の三者の繋がりから「生（エラマ）」を考察する試みである。

本書は博士論文を土台としており、書籍化にあたって一般読者にも読みやすくなるよう、先行研究分析の圧縮や、アーカイブ資料引用の巻末付録への移動など、大幅な書き直しを田中先生にお願いした。本書の編集担当に決まってからマルチスピーシーズ人類学の本を数冊読んだ程度の知識しかない編集の意見をよく聞いてくれたと思う。また、より視覚に訴えるため、田中先生にフィールド先の樹木や家屋の挿絵を依頼したところ快諾していただいた。さらにカバー図版も「カルシッコを刺繍で表現したらどうでしょうか」とお願いしたところ、写真のようなすばらしい刺繍を仕上げていただいた。

「この研究成果をどうしたらもっと多くの人に伝えられるか」ということを学術出版の編集者としていつも意識するようにしているが、本書の場合、研究成果という以上に、樹木とともに生きるヌーティネン家の日々の暮らしに私は魅了され、校正用のゲラを読むたびに内容に引き込まれた。

「風習が終わりを告げつつあるいま、この時代に、カルシッコの風習を続ける人々がどのような想いでこの風習を続け、樹木、死者、生者の多様な繋がりの中で生きているのかを記し、後世に伝える。これが本書の使命だろう」と「はじめに」にある。誰かが記録しなければ埋もれてしまうだろう生のささやかな営みを記録し未来に届けることは、学術出版の使命にも重なる。

特集＊いまこそ、学食!!

学食改革素案

藤原辰史（京都大学准教授）

条文草稿の部

前文　人間は、その人が食べるものによって構成される。大学の学問も、その構成員が食べるものによって構成される。学食は、大学の知性の鏡である。内実の豊かな知性は、内実の豊かな食事に宿る。

植物、動物、社会、精神、そのすべての真理を探究する大学は、その全現象の結晶である食事の改善に力を注がねばならない。その軽視ほど大学にとって恥ずかしいことはない。学食を軽視する者は学問を軽視する。なぜなら、自然科学も社会科学も、もともとは日々の営みのなかから生まれたのであるから。

学生の舌を鍛えよ。舌にもっと光を。もっと知を。そして、もっと多様さを。味わう能力を鍛えることは、作品を味わう能力を鍛えることに間接的に影響を与える。「飲み込む」あるいは「栄養を摂る」というレベルで食事を終わらせてはならない。

即座に学食の改革を始めよ。生協の理事は本文を読んだあと、すぐに会議の招集をかけよ。安価で美味なる食事の追求をひとときも怠ってはならぬ。大学の人事権を改革し、教授会の権限を弱体化させるよりも効果的にかつ総合的に大学を活性化し、学生の勉学を進展させ、研究者のモチベーションを高めることができる。

第一条　学食は、近隣あるいは縁のある農家・漁家・畜産家ならびに農学部農場と関係構築を急げ。総長室でお茶会を開催してでも築け。市場で評価されぬ野菜や果実を安価に購入できるよう調整せよ。食は、人間と自然の関係性のなかでしか生じ得ない。農家、漁家、流通業者、調理スタッフ、清掃人、そして事務員、学生、教員、山、川、海、田畑。そのどれかが欠けても学食は成り立たない。効率だ

けを求めた中央集権的な、「これ食べさせておけば十分でしょ、学生だし」的フードシステムから学食を解放せよ。なぜなら、そのフードシステムはグローバルサウスの児童労働や低賃金労働で成り立っているからだ。大学は、構造的暴力に加担するほど愚かであってはならない。

第二条　学食の調理者の地位をいちじるしく向上させ、給与を高くし、調理者の創意工夫を活かせ。調理者とともにレシピを構築し、そのための費用を惜しむな。「調理なんて誰でもできる」的老害男性的な給与設定を即座に破壊せよ。料理の卓越した能力をもつ調理者を、コールドチェーンの最終処理者にするにはもったいなさすぎる。

学食は、調理者の基本的人権を尊重し、調理者の尊厳を守り、人間性を学食において解放し、学生や教員や事務員と語らしめよ。調理者の人間性、言葉、人生の苦楽、そのすべては豊かな味へとつながる。大学は、人件費削減と経営改善という一昔前の経済モデルに加担するほど愚かであってはならない。大学は企業ではない。大学は学問の砦なのだ。学問の砦に立てこもるにも、他大学、他国から共同研究者を連れてくるにしても、良質で安価な食事が不可欠である。海外からわざわざ訪れる研究者を失望させてはならない。

第三条　学食の料理長を、大学の評議会に参加させよ。休憩中の学生たちの表情、言葉、仕草、残食から学生たちの状況を観察している店長に学ぶことは多い。そして、良き学食を作るために評議会一同は労力を惜しんではならない。安価で美味な学食は多くの学生を惹きつける以上、学食は経営と深く関わるからだ。

第四条　調味料を一新せよ。化学調味料は使用しない。ドレッシングは手作りで、醤油、味噌、味醂（みりん）は、リスクを冒してでも本物の味を求めて時間をかけ、醸造している中小企業から購入し、大学もその作り手の心意気に刺激を受けよ。たとえば、大豆粕から醤油を生産する大企業ではなく、本物の醤油をめざす企業と複数契約し、買い支えよ。地域経済の活性化とその持続に貢献せよ。地域の事業者の大学への信頼が高まり、大学が存在する地域の活性化は大学の活性化につながる。

第五条　茶とコーヒーはかならず大手の資本ではなく、地元の小さな店から入札せよ。どこにでもあるチェーン店ではなく、たとえば若者のアイディアに満ちた喫茶店を地元の人間に経営させ、地域経済を活性化せよ。大学は、空白地にできたのではない。大学はコミュニティーの一員であらねばならない。その自覚なくして学問に打ち込めると奢ってはならない。

第六条　メニューの基本をシンプルにせよ。大きな調理器具で燃料を節約できる料理に特化せよ。その場で炊いた、うまいコメと毎回具沢山の味噌汁を基本とし、おかずは旬に応じて調理員の創発に任せよ。コメは小麦よりもアレルギーが少ない。パンや麺は、地域の小麦農家を育てるので

あれば、調理せよ。生野菜は消毒しないこと。消毒液の香りが風味を損ねる。やがて、化学肥料や農薬のできるだけ使っていないコメを、実力ある若手農家から注文し、地域の農家を育てよ。数の多い学食の利点を存分に活かし、地球環境問題と都市集中問題の解決に貢献せよ。

第七条　食堂は小さく、多く設置せよ。最低でも各学部に特色ある食堂を置け。あるいは、フードコート方式にし、地元の小さな店舗に出店させて、中央部に移動式のテーブルを置き、大学と地元の融合的発展を目指せ。行列を解消することで、学生が昼間に図書館を利用する可能性を広げよ。

第八条　安価で美味な学食を地域に解放せよ。地域のお年寄りにとって、若い学生のなかにいるだけで健康によいだろう。また、学食で救われる命があるならば、大学として誇りである。ワンオペレーション、家庭内暴力から逃れた人間、社会から疎外された人間、そんな人たちに大学が安らぎの場所を与えよ。ならば、そこにはやはり知性が宿る。社会の矛盾がその当事者によって語られることほど、学生にとって大きな学びはない。

第九条　大学からパーテーションを取り除け。パーテーションに付着した唾液をそのままに残しながら食べるほうが、感染リスクが高い。声が聞きづらいので声が大きくなり、余計感染リスクが高くなる。中央集権的ではなく、現場の監督の判断で学食を心地よくせよ。学食の劣化したデザインは、学生の美的感覚を劣化させる。食べる場所をきちんと飾ること。調理すること、食べることがどれほど美的な行為なのかを意識するとしないとでは、学生の卒業後の幸福度にも大きく関わってくるだろう。

第十条　地元の酒、クラフトビール、ワイン、緑茶、煎茶、麦茶、地元の果実を用いた各種ジュースなどのドリンクバーを充実させよ。できれば、市場では評価されにくい良質なものを探し、支えよ。学生のバーテンダーを置き、酒の好き嫌いにかかわらず、さまざまな人間にとっての宿木になる場所を作れ。カウンターは一人で時間を過ごしやすく、本も読みやすく、学問のアイディアを交換しやすくなる。

事例研究の部

東京藝術大学取手キャンパスの「藝大食堂」は、国立大学の学食としては驚愕すべき実践を続けている。調理員の手作りのランチは美味しすぎて京都大学に二号店を出してほしいと真剣に願ったほどだ。ドレッシングは大手企業の商品ではなく、手作りであり（第四条）、地元の農家から取り寄せたり、寄付してもらったり、学内農園の野菜を用いたり、近くのタケノコを使ったり、構内のクリを使ったり、構内の梅でジャムを作ったり、素材もすばらしい。何より、調理担当者たちの研究に基づき膨大なレシピ集が作られている（第二条）。学生たちとよくコミュニケーションをとり、卒業展示に参加するなど、深い関係を結んでい

る。「取手の母」との関係性が食事の味わいであるという本素案の基本原理をまさに実際に実践している。一日四〇食から八〇食だからこそ可能かもしれないが、フードロスはゼロである。値段も物価高騰のわりには抑えられている。

調理スタッフと話す機会をいただいたが、話を聞いていてもっとも私が心動かされたのは、スタッフみなが仕事に誇りを持っていて、学生たちの話をするときの顔がまるで我が子を語るようにイキイキとしていて、たくさんの言葉を持っていることだった。学生たちの帰る場所が実家以外にあることの重要性は幾度強調してもしすぎることはない。

建物も居心地がよく、光がよく入り、天井が高く、温かい空気で満ちていた。いつか、学生の結婚式をやりたいという、あるスタッフが抱く夢は、いつ実現してもおかしくないと思った。

海外の体験で忘れがたいのは、ドイツのハイデルベルク大学の学食「ツォイクハウス・メンザ」であった。かつての武器庫を改修した重厚な作りで、居心地の良い建物である。ハイデルベルク大学で客員研究員として仕事をしているとき、複数の学生から、ドイツ最高の学食だと聞いていたので、行ってみた。

まず驚いたのは、信じられないほど新鮮な地元の生ビールが飲めることだ。カウンターがあって、そこでいろいろな飲み物を味わうことができる（第十条）。学生も教員も思い思いに、コーヒーやビールを味わっては語らっている。当然、活気があって、みな楽しそうである。一人で行きやすい、というのも特徴である。

それから、料理はすべて量り売りである。野菜たっぷりの料理が盛りだくさんで、菜食主義者にも好評である。味付けも日本よりはややしっかりしているが、ドイツの料理店のような塩辛さや重さはほとんどなく、健康的で、しかも美味である。

韓国の全州大学の食堂も忘れがたい。国際学会で訪れたときのランチは、ビビンパであった。全州発祥の混ぜご飯である。ご飯をどんぶりに盛ったあとは、思い思いにごま油の香りがしみた惣菜をトッピングして、牛骨出汁のスープをつけるだけ。あとちょっと惣菜もあった記憶があるが、このシンプルさがいい（第六条）。シンプルであるが、具材が豊富なので、自分用にカスタマイズできて楽しい。韓国海苔や味噌類も取り放題で、とても開放感がある。

私が学生時代の京都大学生協の中央食堂、西部食堂ルネ、北部生協は、かなり広くて、メニューも豊富であった。もちろん、冷凍食品も多かったが、それでも現在のように「人件費削減しています」「料理は縮小しています」というようなメッセージが食事にくっついているような粗末な感じがまったくしなかった。なにより、活気があ

った。

夏はそうめん、冬の鍋は十種類ほどあったが、これは最終工程をちょっと工夫しただけで、きわめてシンプルである。温玉が入ったり、豚肉が入ったり、ほうれん草が入ったり、ベースがシンプルだけに、多彩な味わいがあって、学生にも人気だった。おでんもサラダバーもあった。

中央食堂にはカフェスペースもあった。手作りのサンドイッチも並んでいて、なかにはチェーン店ではないコーヒー店もあった。コーヒー一杯は百円を切っていて、手軽に注文できて、しかも美味しかった。

協同組合なのだから、景気変動のなかにあっても、安定的に我々会員に安価で美味な食事を提供するのが筋だと思うが、最近は「経営合理化」を優先している印象がある。コロナが大きなダメージを与えたことは間違いないが、それ以前から新自由主義的な改革で、さまざまなメニューが消え、しかも味も落ちた。早急な改革が求められる。

感謝激励の部

あまりにも魅力的な藝大食堂の調理スタッフのみなさん、私を招いてくださった取手アートプロジェクトのみなさん、京大では、いつも子どもを連れて行ったとき、ラーメンの胡椒を抜いてくれた中央食堂の調理スタッフの方、美味しい野菜炒めを目の前で中華鍋をふるって作ってくれた北部生協の学生アルバイト、いつも学食を掃除している清掃員のみなさん、ひっくり返るような美味しいビールを樽から注いでくれたツォイクハウス・メンザのスタッフの方、みなさんに心からお礼を申し上げます。

そして、みなさんが食を通じて真の大学改革を推進されていくことを心から望みます。学食の内部で新しい試みを始めているみなさん、いよいよみなさんの出番です。学生たちの胃袋から新しい学問の土台を一緒に作っていきましょう。

■岩波現代文庫■

松浦寿輝

明治の表象空間（全三冊）

新たな「表象的風景」の輪郭線を描写する

学問分野ごとに仕切られた分類の枠を排し、混沌状態に立ち並ぶ言説の総体を横断的に俯瞰することで、近代日本の特異性を描出し、「表象空間」のダイナミズムを浮かび上がらせる。毎日芸術賞特別賞受賞作。

上 権力と言説
中 歴史とイデオロギー
下 エクリチュールと近代（解説＝田中純）

定価 各1760円

岩波書店
東京・千代田・一ツ橋
www.iwanami.co.jp

学生に食を提供しつづけて——生協食堂の取り組み

大築 匡（全国大学生活協同組合連合会 広報調査部長）

大学生協の食堂が目指すもの

戦争終結後、一九四五年九月に大学・高等専門学校は授業を再開したが、深刻な食糧不足と戦災による校舎の消失などにより事実上の休講状態が続いた。こうした状況下で、大学生協は「学ぶことは食うこと」をスローガンに設立された。

今日の大学生協の食堂は、「組合員のこころとからだを育む生活基盤としての食生活支援事業」であることを目指している。（「大学生協2030Goals」）

生協ならではの「学食」とは

学生の生活から

大学生協の食堂は単に食事を提供するだけでなく、現在と将来の心と身体の健康を育む視点から様々な活動をおこなっている。

全国大学生協連がおこなっている「学生生活実態調査」では、毎年、大学生の食事の実態についても調べている。「第五九回学生生活実態調査」（二〇二三年一〇～一一月実施、回答数九八七三人、三〇大学生協、回収率二二・八％）では、一日三食食事を摂っている学生は五五・八％に留まる。朝食の摂取率は六九％で、約三割が朝食を摂っていない。朝昼兼用は全体の二二・一％だった。

また、食事代（有額回答の平均）については朝・昼・晩の三食とも減少した。物価高の影響により、食費を削る学生が増えていることが推定できる。

	22年	23年
朝食	257円	226円
昼食	534円	495円
夕食	890円	658円

出典：全国大学生協連第59回学生生活実態調査

朝食摂取率の低下、食生活の乱れについては、大学生協

事業連合加盟の大学生協でおこなわれている「食生活相談」の相談事例からもうかがえる。

大学生協事業連合加盟の大学生協では一九八九年から学生を対象に食生活相談をおこなっている。直近二年間の二〇二二年春・秋及び二〇二三年春食生活相談事例（累計：男性二七七名・女性一九一名計四六八名　自宅生二九七名・自宅外生一七一名）によると、次のような特徴が報告されている。

大学生になって、食事の摂取時間帯が不規則になり、朝食を摂らなくなっている実態が明らかになった。生理不順や肌荒れ、体調面での不安を訴える学生もいるが、食生活の乱れに無自覚な学生も多い。大学生協の組合員は一八歳から二二歳までの学生が大多数であるが、若いときの食生活の乱れが原因で三〇代・四〇代以降心身の不調につながることも十分に考えられるため、注意喚起が必要である。

学生自らが賢い消費者に

①自らも運営者の一人として　大学生協は大学の構成員を組合員とする協同組合組織である。組合員は、消費者として「より良いものをより安く」求めるだけでなく、自らも運営者の一人として関わることができる。この点は大学生協の大きな特徴である。

大学生協では学生組合員の代表を理事として選出しており、学生自らが「賢い消費者」になるために消費者の視点だけでなく運営者（経営）の視点についても実践的に学ぶことが可能だ。たとえば「食堂の営業時間をどうするか」という課題を考えるためには、利便性を求める利用者としての視点だけでなく店舗損益にも目を配らねばならない。赤字が続けば食堂店舗を維持できなくなるおそれがあるからだ。学生たちも理事の一人として理事会での意思決定に至る議論に参画し、その結果が毎月の損益に与える影響を直接見聞きできる。大学生協の食堂や店舗では「一言カード」によって組合員の声が寄せられているが、その内容は

知泉書館

パイデイア（中）
ギリシアにおける人間形成
〔知泉学術叢書 31〕
W. イェーガー／曽田長人訳
ギリシア人の教養と理想的人間像の形成の経緯を描く名著の待望訳　新書/846p/6500円

教 理 講 話
〔知泉学術叢書 32〕
新神学者シメオン／大森正樹・谷隆一郎訳　ビザンティンの神学者が聖職者へ信仰の道を説く　新書/552p/6300円

デカルト小品集
「真理の探求」
「ビュルマンとの対話」ほか
〔知泉学術叢書 33〕
山田弘明・吉田健太郎編訳
主要著作を補完しつつ独自の内容をもつデカルト関連の貴重な資料　新書/372p/4000円

スキャンダルの狭間で
カント形而上学への挑戦
『純粋理性批判』とルソーの影響
ジェレマイア・オルバーグ
ルソーがカントに与えた見えない影響を丹念に分析した必読の書　A5/328p/4500円

意識と〈我々〉
歴史の中で生成する
ヘーゲル『精神現象学』
飯泉佑介　『精神現象学』をヘーゲル哲学体系の中で包括的に解釈。思考の運動と全体像を捉える　菊/444p/6000円

マックス・シェーラー
思想の核心
価値・他者・愛・人格・宗教
金子晴勇　実存思想に隠れて知られていなかったシェーラー思想の核心を分かり易く解説する　四六/266p/2300円

東京都文京区本郷 1-13-2（税別）
TEL03-3814-6161 FAX03-3814-6166
http://www.chisen.co.jp

理事会にも共有される。学生理事はこのような利用者である組合員からのフィードバックに自分たちの利用実感を重ねあわせて意見を述べる。学生たちは、消費者としてだけでなく運営者の視点も学ぶことができるのである。

②「健康・環境・ダイバーシティ」の視点から　大学生協の食堂では、学生自らが「賢い消費者」になるために、「食べること」を通じて健康に気を配り、環境やダイバーシティ、SDGsの視点を学ぶこともできる。大学生協の食堂は学生に対して「安さ」という経済的価値のみならず、一種の教育的価値を提供していると言える。

自炊教室や簡単なレシピの提供（大学生協WEBサイト、パンフレット配布など）によって、主に自宅外生に健康に気を配った食習慣を身に着けるように提案している。前述の「食生活相談」もそのような活動の一環である。

大学生協食堂では「ミールプラン」や「ミールカード」等の名称の、定期券型の食堂利用専用電子マネーを使用できるようにしている。学生生活実態調査や食生活相談での相談事例等から、学生が支出の節約をする際に食費を真っ先に削る傾向があることがわかっている。そこで、あらかじめ定期券型の電子マネーによってバランスよく食事を摂れるように保障するためのサービスを提供している。とくに自宅外生の保護者にとっては、現金での仕送りと異なり、離れた場所で暮らす子どもが確実に食事を摂ることができるので安心である。学生は利用履歴を専用サイトで確認することで、栄養バランスに気を配った食習慣を自然に身に着けることができる。

環境・SDGs・ダイバーシティの視点では、次のような先進的事例がある。

東京大学生協では、東京大学GX学生ネットワークと連携し、大学内のサステナビリティの推進を目指す活動に協力している。二〇二三年五月二九日～六月二九日におこなわれた“U-Tokyo Sustainability Week 2023”にあわせて、「福島産直あおさメニュー」「千葉県銚子加工魚メニュー」「NEXTミート（大豆ミート）メニュー」を週替わりで出食した。いずれも産直食材の使用促進、二酸化炭素排出量の削減に効果がある。《地球にいいことを食べる理由に》というキャンペーンは、まさに賢い消費者を育てる活動であると言える。

長崎大学生協では二〇二二年九月に学生から寄せられた要望をきっかけにして、二〇二二年一二月からヴィーガン・メニューの提供を開始した。二〇二三年度通常総代会での「ヴィーガン学習会」を通じて学生組合員自らが食の多様性や、環境負荷の軽減、動物福祉などの社会問題の解決に目を向ける機会となった。この学習会は、長崎大学生協組織部（学生委員会）が企画・運営したものである。

他にも、イスラム圏からの留学生が多い大学では、ハラル・メニューの出食をおこなっている大学生協もある。ハラル・メニューの提供にあたっては、食堂厨房の施設対応

や留学生自身の理解や納得も必要であるため、大学生協の努力だけではなく、大学の協力が得られることが大前提である。

また、食堂で内製しているお弁当の容器は、簡単にきれいに再利用できる「リ・リパック」を採用している食堂も多い。「リ・リパック」は汚れたフィルムを剥がせば、容器自体は再利用できるので、水を汚すこともない環境負荷の低い弁当容器である。大学生協によっては、この回収方法を学生委員会が食堂で学生に呼びかけている事例がある。

さらに、大学生協では食堂の割り箸に間伐材・国産材を原材料とした「樹恩割り箸」を使うことで、林業を維持し森林を守ることにつなげている。「樹恩割り箸」では、食堂で使用済のものも回収し、パーティクルボードにリサイクルしている食堂もあり、その点でも環境負荷を軽減する効果がある。二〇二三年度（二〇二三年四月～二〇二四年三月）の実績では六四大学生協で約七六六万膳の「樹恩割り箸」を使用している。

大学と協力して

①一〇〇円朝食　朝食を食べない学生の増加は、健康面での課題にとどまらず、生活習慣の乱れにつながり、学業継続が困難になることすらある。大学生協の中には、大学の協力を得て一〇〇円朝食の提供をおこなっているところがある。たとえば、早稲田大学では、早稲田大学学生健康増進互助委員会と早稲田大学生協が主催し、早稲田大学校友会の協賛を得て、二〇二三年秋からコロナ禍に中断していた一〇〇円朝食を再開した。

②ヘルシーキャンパス宣言と生協食堂　立命館大学生協では、立命館大学を含む京都府内の大学が共同実施している「ヘルシーキャンパス宣言」の活動に協力しているが、その一環として、「バランスよく食べようチャレンジ」と名付けたキャンペーンを実施し、食堂で使用するトレイ（お盆）にシールを貼り学生がバランスよく食事を摂れるように提案している。学生たちはトレイシールの上に描かれたマークにしたがって、主食（ご飯）、汁物（味噌汁や豚汁）、

真実と修復
暴力被害者にとっての謝罪・補償・再発防止策
ハーマン　暴力被害者は何を求めているか。トラウマ問題のバイブル『心的外傷と回復』を継ぐ総決算の書。 **阿部大樹訳 ¥3740**

パレスチナ和平交渉の歴史
二国家解決と紛争の30年
阿部俊哉　なぜいつも類似のパターンで潰えてきたのか。経過を客観的かつ丹念に跡づけ解決へ導く基本情報と洞察。 **¥4400**

大適応の始めかた
気候危機のもうひとつの争点
フィリップス　避けがたい気候危機に備えて「適応」の議論が急務だ。自治、公正性を重視する適応入門。 **齋藤慎子訳 ¥3300**

世界目録をつくろうとした男
奇才ポール・オトレと情報化時代の誕生
ライト　世界書誌、国際十進分類法、「ムンダネウム」。世界平和をめざし情報学を発展させた奇才の生涯。 **鈴木和博訳 ¥4950**

文化的コモンズ
文化施設がつくる交響圏
佐々木秀彦　博物館、美術館、図書館…文化施設を社会的共通資本として営む視点を示す、成熟社会の新スタンダード。**¥4180**

「まちライブラリー」の研究
「個」が主役になれる社会的資本づくり
礒井純充　開始から12年、個人から企業まで全国千ヶ所余に広がる活動の鍵を、提唱者がリサーチをもとに分析する。 **¥2860**

パーソナリティの発達
ユング　子どもと家族、教育や心の成長をめぐる論考全9編。ユング心理学の中心的課題。**横山博監訳　大塚紳一郎訳 ¥4400**

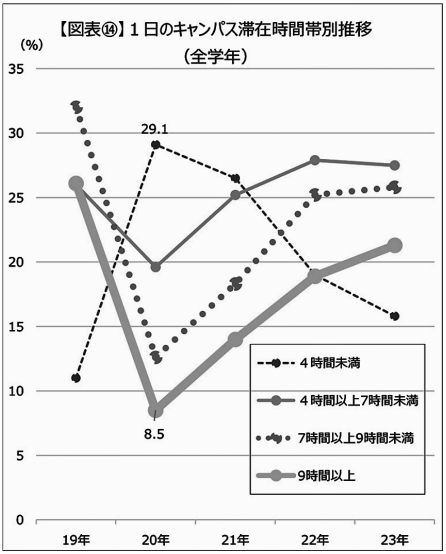
東京文京本郷2丁目20-7　**みすず書房**
tel. 3814-0131 fax 3818-6435（税込）
www.msz.co.jp

【図表⑬】１日のキャンパス滞在時間（全学年）　(%)

	全学生計				
	19年	20年	21年	22年	23年
４時間未満	11.0	29.1	26.5	19.0	15.8
４時間以上7時間未満	26.0	19.6	25.2	27.9	27.5
7時間以上9時間未満	32.0	12.6	18.3	25.2	25.8
9時間以上	26.1	8.5	14.0	18.9	21.3
無回答など	4.9	2.7	2.3	4.3	5.9
平均時間（0を含む）	7.4	5.2	5.9	6.5	6.8

図表⑬の詳細　(%)

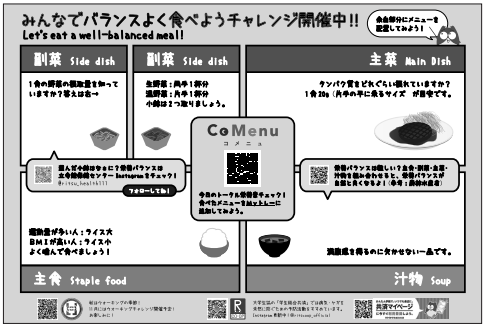
	全学生計				
	19年	20年	21年	22年	23年
２時間未満	2.9	10.3	8.8	6.2	4.4
２時間～	2.9	8.7	7.6	4.8	4.4
３時間～	5.2	10.1	10.1	8.0	7.0
４時間～	5.8	7.7	8.4	7.9	7.3
５時間～	9.2	5.8	7.7	8.8	8.4
６時間～	11.0	6.1	9.1	11.2	11.8
７時間～	19.6	6.6	10.3	15.1	14.8
８時間～	12.4	6.0	8.0	10.1	11.0
９時間～	12.1	4.1	6.5	9.4	9.9
10時間～	8.8	3.1	5.1	6.7	8.2
12時間～	5.2	1.3	2.4	2.8	3.2
無回答など	4.9	2.7	2.3	4.3	5.9
平均時間（0を含む）	7.4	5.2	5.9	6.5	6.8



出典：全国大学生協連第五九回学生生活実態調査

（1）食材費および人件費高騰
（2）物流問題
（3）メニュー価格改定や経済環境悪化による喫食回数の低下や食事内容の貧弱化
（4）コロナ禍以後の大学生活

（1）と（2）は、外食チェーン一般にも当てはまる課題かもしれない。しかし、そもそも大学は授業期間と長期休講期間がある。年間を通じて一定の客数が見込めるようなことはないため、安定した利益確保が難しいのが実情だ。



主菜（タンパク質のおかず）、副菜（野菜類や小鉢）を選ぶことで、自然とバランスのよい食事が摂れるようになる。

大学生協食堂をとりまく今日的課題

大学生協食堂をとりまく今日的課題には、次のようなものがある。

加えてコスト増や物流問題はただでさえ困難な食堂経営を圧迫している。

また、（3）と（4）は学生の生活パターンの変化が食堂経営に与える影響である。食材費高騰によりメニュー価格改定を余儀なくされているが、物価高の中で学生自身の節約志向は一層高まっている。そのため、利用回数減少や食事内容の貧困化につながっている面も否定できない。

さらに、コロナ禍後の学生生活の変化がある。コロナ禍でサークル数が減少し、いまだに回復していない。また、コロナ禍で定着したオンライン・オンデマンド講義は、コロナ禍後も継続しているのが実態である。第五九回学生の消費生活実態調査でも「一日のキャンパス滞在時間推移」を調べているが、「九時間以上の滞在」が二〇一九年と比較して減少したままでコロナ禍以前に戻っていない。

まとめ

大学生協の食堂は単に食事を提供する場というだけではなく、学生自らが賢い消費者となるために、運営者の視点や健康・環境・SDGs・ダイバーシティの視点を学ぶことができる場でもある。これは一般の外食チェーンにはない大学生協だけのユニークな特徴である。

しかしながら、食材費・人件費の高騰、物流問題、物価高による利用減少、コロナ禍後の学生生活の変化等から食堂経営は様々な困難を抱えている。このような困難の中で、食堂経営を持続可能ならしめるためには、自らの価値を高めつづけることが必要であり、同時にその価値を学内に発信し、大学構成員の生活向上を目指すために大学にとっても欠かせないパートナーであることについての理解を様々な実践を通じて広げていきたい。

私たち大学生協は、学生生活実態調査や食生活相談等で浮かび上がってきた学生の実態を踏まえ「組合員のこころとからだを育む生活基盤としての食生活支援事業」を自らのゴールに定め、大学とともにキャンパスの福利厚生事業の中心であり続けたいと願っている。

〈新刊〉

王崧興『亀山島』と漢人社会研究
王崧興著 / 川瀬由高ほか編訳 「周辺」から中国の社会を照射。原石のような民族誌を完訳。陳其南の寄稿や論考・資料から多角的な再評価。 3740円

沖縄における門中の歴史民俗的研究
小熊　誠著 門中の祖先はどのように観念されているのか。日常生活の文脈に沿って沖縄人の家族・祖先観の全体像を再構築。5500円

〈ブックレット海域アジアとオセアニア〉

オセアニアの気候変動と適応策
古澤拓郎編 地球から地域へ。政治も科学も見いだせない正解。複雑なマトリックスを整理し、人びとの最善の未来を考える。 990円

モノからみる海域アジアとオセアニア
小野林太郎編 海辺の暮らしと精神文化。オーストロネシア語群を話す人びと。古来からのつながりを雄弁に物語るモノたち。 990円

南太平洋の中国人社会
河合洋尚著 客家、本地人と新移民。中国人社会の多様性は、時間空間の軸で顕著だ。島々でその現在を探る、初の試み。 990円

薬草とともに生きる
杉野好美著 インドネシアのジャムウ行商婦人と顧客。多元的ヘルスケア社会の中で、庶民に根強い人気の飲料を紐解く。 990円

風響社
〒114-0014 東京都北区田端 4-14-9
〒 03-3828-9249（定価は税込）
URL: http://www.fukyo.co.jp

特集＊いまこそ、学食!!

偶然をつくる食堂——ダイニングラボ・食堂コマニ

川添善行（東京大学准教授）

キャンパスの魅力

近年では、一般メディアでも世界の大学ランキングなるものを見かけることが多くなってきた。個人的には、大学のあり方は多様であり、それを限られた指標に基づいたランキングとして並べることにどのような意味があるのだろうかと思うが、とはいえ、そのような悠長なことを言っているだけで済まされる時代ではないようで、世界中の大学が自身の魅力向上に努めざるをえないのが現実だと思う。では、魅力的な大学とは、いったいどのようなものだろうか。当然、教員の質が高いことは最低限だが、それだけではないと多くの人が気づき始めている。魅力的な大学の条件とは、つまり、そこで学びたい、そこで研究したいと思えるかだ。そして、建築家という立場から見れば、その要因はある程度空間的な価値にあると信じている。例えばハーバード大学を想像してもらうとわかりやすいだろうが、研究や同窓生の質が高いのはもちろんのこと、緑陰と日差しの柔らかなキャンパスの美しさやボストンという街の魅力が大きな要因になっているのは明らかだろう。

そして、東京大学でもキャンパスの魅力をどのように向上させるかという議論が常になされてきた。その中の一つが先述の空間的な価値であり、より具体的にはキャンパス計画である。キャンパス計画とは、文字通りキャンパスの空間的なデザインを中長期的なビジョンに基づいてどのように決めるかというものであり、それを立案する組織としてキャンパス計画室という会議体がある。

このキャンパス計画室は、東京大学のすべての建物のデザインをコントロールしているが、私のような建築出身の教員だけでなく、様々な部局からメンバーが集まり、自分たちのキャンパスがどうあるべきかを毎月議論している。

私自身もこのキャンパス計画室のメンバーを十年以上務めているが、その中で気づいたのは、キャンパスは建物を作るだけでは成立しないということである。もちろんキャンパスに建物は不可欠であるから、一棟一棟の建物の完成度が高いことは重要である。しかし、優れた建物があるだけでは良いキャンパスとは言えない。私は、良いキャンパスとは教室以外の場所で豊かな時間を過ごすことができるかによって決まると思う。例えば、美しい並木が生み出す街路のような空間や、のんびりと佇むことができる広場のような空間は、教室外での様々な思索の時間を増やしてくれることだろう。端的にいえば、教室以外の空間の質がどれくらい豊かであるか、そのバリエーションをどれくらい生み出せているかがキャンパスの魅力を左右するのである。

食と人材

駒場にはⅠとⅡの二つのキャンパスが存在している。私を訪ねてくださる人々の中にも、一定の割合で間違われ迷子の助けの電話をかけてくる人がちらほらいらっしゃるが、この両者は位置的にも離れているし雰囲気もだいぶ異なる。駒場Ⅰキャンパスは、東京大学に入学した学部一・二年生が必ず配属される場所であり、高校を卒業したばかりの学生たちが放つ若々しさに溢れている。放課後にはサークル活動に勤しむ姿もよく見かける。一方、私が所属する東京大学生産技術研究所がある駒場Ⅱキャンパスには、先端科学技術研究センターという研究所があり、また隣接する敷地ではあるが東京大学出版会もあるなど、いずれも素晴らしい成果を出し続ける組織が集まっている一方で、賑やかなイメージを持たれがちな一般的な大学キャンパスと比べると少し物静かであるという印象もある。というのも、研究所という性格から学生だけでなく研究者の数の方も相対的に多く、彼らはプロフェッショナルの研究者として一日を過ごすので研究室の中にいる時間が長く、講義の合間に教室を移動することもない。そうしたキャンパスの特性から考えると、新しい研究のシーズを生み出すような横と横

列島の東西をつないだ〈東海〉のあたらしい中世史像

東海の中世史

全5巻　6月刊行開始

【企画編集委員】山田邦明・水野智之・谷口雄太　『内容案内』呈

1 中世東海の黎明と鎌倉幕府（第1回）
生駒孝臣編　中世社会がかたちづくられる激動の時代。２９７０円

カツオの古代学
和食文化の源流をたどる
三舟隆之・馬場 基編　土器や木簡等を検証し、最新の科学技術による分析で調理法を再現。３５２０円

創られた「天皇」号
君主称号の古代史　３８５０円
新川登亀男著　天皇の呼称の変遷から、古代国家の理念を読みとく。

荘園史研究ハンドブック〈増補新版〉
荘園史研究会編　時代ごとの荘園の特質がわかる！ 荘園史の理解に座右必備の入門書。２８６０円

近世古文書用語辞典
佐藤孝之・天野清文編　約11500の用語・用字を精選し解説。豊富な文例に現代語訳を付す。４９５０円

続 沖縄戦を知る事典
戦場になった町や村
古賀徳子・吉川由紀・川満 彰編
24の市町村の沖縄戦を一冊で知る。非体験世代28人が結集した第2弾。２６４０円　『内容案内』呈

最新歴史情報を提供する月刊誌
日本歴史
日本歴史学会編集
年間購読料９０００円

吉川弘文館
〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151／価格は税込

のつながりや偶然の出会いをどうやって戦略的・組織的・持続的に生み出すかということが、このキャンパスだからこその重要な課題であった。

その時に思い出したのが、ニューヨークで聞いたとある仮説であった。以前、ニューヨークのスタートアップ企業を訪問した際、彼らが口々に話していたのは、おいしいランチを出すことが、自分たちの企業の生存戦略にとって非常に重要だという、なんとも面白い仮説だった。なぜならば、スタートアップ企業の労働条件等はいずれもそれほど大差はなく、その中で優秀な人材をどう確保するかが重要であり、その点においておいしいランチというものはその企業で働く意欲を高めたり、学生のインターンシップを集めるためにも非常に重要なツールだということだった。私は、この仮説こそ、駒場Ⅱキャンパスに応用すべきだと考えた。つまり、それぞれの分野で優れた研究者が集まっているキャンパスの中で偶発的なコミュニケーションが果たしうる可能性や、学生たちにとってこうした「大人っぽい」キャンパスの魅力を感じてもらうきっかけとしての食堂をどうつくるかが重要だと考えたのである。こうして生まれたのが、ダイニングラボ・食堂コマニである。

偶然を戦略的に

二十年ほど使用されていたプレハブの食堂スペースを、研究者同士の活発な交流や多機能に利用できる新しい食事空間とするべく、吉江尚子先生を主査とする学内ワーキングでの二年間におよぶ議論をうけて内装改修を行った。詳細の設計は、以前川添研の助教を務めていた頃にこのキャンパスで長い時間を過ごした松繁舞さんにお願いした。建築的な操作としては、まず閉鎖的だった入り口部分に大きく開口を取りなおし、明るいエントランス空間とした。エントランス壁面には、清水淳子氏によって食堂のコンセプトを表すグラフィックレコーディングが描かれている。食堂内は、天井の一部をくり抜き一部を下げることで、平均天井高を変えずに空間を曖昧に分節している。同時にコミュニケーションの基盤として、ロングテーブル、壁面ライブラリー、コの字カウンター、小上がり、屋台、ラウンジコーナー、アームチェア等の家具を配置し、多様な居場所をつくっている。中心に据えられた長さ九メートルのロングテーブルは、バラバラに座りつつも同じテーブルを共有するという、近すぎず遠すぎずの距離感をつくりだしている（本誌表紙参照）。照明計画では、着席したときに窓の外の豊かな緑に目がいくように天井面の照度を落とし、テーブル天板の反射光と布製のペンダントライトで明るさを演出した。木漏れ日を通すカーテンも生地の質感を専門家の方に選定いただいている。

この空間のデザインにあたっては、「居方」の多様性をどのように作るかということに注意を払った。例えば、同じ椅子であっても、床から三十センチの高さ、四五センチ

の高さ、六十センチの高さで全く過ごし方の質が変わる。さらに座面が柔らかいのか硬いのかによっても滞在の体験が大きく変わる。私たち建築家は、壁の色や天井の材料といった物質的なものだけではなく、滞在の仕方、つまり「居方」をデザインしているのである。

こうして、二〇二二年に完成したダイニングラボ・食堂コマニでは、様々な空間の仕方によって空間体験のムラを一つの建築の中に生み出している。さらに、均質なテーブル配置ではなく、自由に好きな居場所を選択できる客席配置と自然光を生かした照明計画によって、快適性を向上させつつ、出会いの偶発性を生み出せる空間とすることができた。広い空間の中にでもいろいろな滞在の仕方をしていいという「居方」の多様性を生み出すことが、結果的にはこの場所で遭遇する出会いの質を高めると考えたからだ。

食堂コマニの入口付近（撮影　木内和美）

意図しない、というデザイン

ここで、大学にとっての食堂の意味を改めて考えてみたい。大学という空間におけるやりとりの多くは言葉によって成り立っている。通常のゼミでの意見交換や時間の多くを占める講義など、抽象的な概念を扱う言葉なしでは成立しない。言葉は、大学の活動にとって必要なツールである。デンマークの建築家でもあり、コペンハーゲンの計画に深く関わったヤン・ゲールは、屋外の活動を三つの種類に分けている。一つは必ずやらなければいけない必要活動、もう一つは任意活動、最後の一つは誰かとの関係の中で行われる社会活動である。物的な環境が良くない低質な場所では、必要な活動は行われるものの、任意活動や社会活動はそれほど行われない。一方で、高質な環境においては、必要活動の量は変わらないが、任意活動や社会活動が増えると指摘している。つまり、必要活動はどのような空間の質でも実行できるわけで、任意活動や社会活動が増える場所こそが良質な空間なのである。

ゼミや講義での言葉が必要活動であるとすれば、魅力的な大学を作るには残りの二種類の言葉を増やす必要があると考えた。つまり、どうしても伝えなければならないことを伝える言葉で満たされる教室という空間に対して、食堂とは任意活動としての言葉、社会活動としての言葉を受け持つ空間なのではないか。食堂はあくまでご飯を食べる場所である。ただ、もしその食堂の空間が話しやすい雰囲気に満ち溢れているとしたら、そこには大学での生活を豊かにする社会的な言葉が溢れるはずだ。目的とデザインの対応が私の研究テーマだが、「話さなければいけない」と規定された空間はどこか窮屈である。そもそも何かをしなけ

食堂コマニのある日の定食（撮影　木内和美）

ればいけないと計画者によって定められた空間はすこし居心地が悪い。一方、食堂はその目的とデザインの関係を柔らかくできる場所である。普段、一緒に活動している研究チームの仲間とその場所に行く。その場所では、おしゃべりをしろと誰かに命令されているわけでもなく、誰からも意図されているわけでもなく、しかし、そうした場所に足を踏みいれることで、自然と生まれるコミュニケーションがある。そうした意図しない言葉の数々こそが、大学の豊かさを成立させているのではないか。すると、やはり食堂という場所は大学にとって不可欠であり、大学の根幹そのものであると私は考えるのだ。

大学の新しい食堂モデル

食堂コマニの運営には、佐藤俊博氏、玉田泉氏をはじめとした経験豊かで素晴らしい方々に入っていただくことができた。彼らは日本各地の食材の大切さを十分に理解したメニューを提供してくれている。東京大学にやって来る海外からの研究者や留学生は、どうしても東京にいる時間が長くなり、東京を日本と同一視してしまう。しかし、日本の本当の魅力は、むしろ東京以外の場所にあると私は思う。そうした日本各地の豊かな風土が生み出す食材、それは各地の文化そのものだと言えるが、そうした文化としての食材を丁寧に、かつ余分な手をかけずに料理してくれた定食は、日本を深く理解する海外の友人たちを増やしていくに違いない。

オープンして二年経った現在では、生産技術研究所の事務スタッフが中心となって、数え切れないほどの仕掛けが同時並行で組織されている。例えば、コーヒーを飲みながら研究者同士もしくは研究者と職員が気兼ねなくおしゃべりができるブレイクタイムという企画であったり、社会連携の一環として大学と企業などが率直に話しあえる勉強会だったりと、ハードのデザインだけでなく運営というソフトのデザインが組み合わされ、大学と社会の接点としての「予期せぬ出会い」を持続的に生み出しつつある。さらに最近では、キャンパス構成員だけではなく、地域の住民の方々にも利用されており、大学と地域の関係の新しいロールモデルになりつつあるようである。このように、大学の新しい食堂のモデルとしてスタートしたダイニングラボ・食堂コマニであるが、大学という枠の中にとどまることなく、地域の食堂、日本の食堂としての役割を同時に見出しつつあることは、当事者の一人として嬉しく思う。

さて、そろそろ食堂に行こうかな。

特集＊いまこそ、学食!!

「学食」をデザインする——学生視点を取り入れた共働プロジェクト

安藤拓生（東洋学園大学准教授）

はじめに

「学食のデザインプロジェクト」は、二〇二二年に実施された東洋学園大学現代経営学部安藤拓生ゼミの活動であり、学内における課題を解決する課題解決型のＰＢＬ（Project Based Learning）の一環として取り組まれたものである。このプロジェクトの趣旨は、利用者の減少が進む「学食」を、学生たち自らの視点からつくり変えることであった。

多くの大学にとって、学食は欠かすことのできない施設である。学食とは学生食堂の略であり、学びや遊び、部活動やアルバイトに励む学生たちの活動量を支えるエネルギー供給源である。しかし、実は多くの飲食店や食料品店が並ぶような都内の大学にとっては必ずしも必要な設備とは言えない。東洋学園大学は、都心に位置する食事には困らない大学である（徒歩五分圏内にコンビニエンスストアが二軒、飲食店も十軒以上見られるし、駅からの通学途中にもさまざまな場所でお弁当が売っている）。このような恵まれた環境の中にあり、学食の利用者が減ってきていることが学内での課題となっていた。さらに、二〇二〇年からの新型コロナウイルスの感染拡大に伴う黙食の推奨に伴って、食堂の利用者はさらに大きく減少していった。

このような背景のもと、学食の存続も含めて、改めて「学生にとって必要な『学食』とはなにか？」を問うことが、本プロジェクトの目的となった。本稿では、東洋学園大学が二〇二二年に行った学食のデザインプロジェクトを振り返りながら、これからの学食の在り方の可能性を考えていく。

プロジェクトの発端

プロジェクトの内容に入る前に、プロジェクトが立ち上がった経緯について説明したい。実は、このプロジェクトの発端は、本学総務部の手痛い経験にある。

本学では、二〇二三年度の食堂のリニューアルに先駆けて、校舎棟の一階エントランスを新しくしている。二〇二〇年当時のエントランスは設備としても古く、また学生への連絡をするためのホワイトボードを利用した掲示板が数多く設置されていた。そのためエントランスとしての解放感が感じられず、開かれた大学というイメージを損なっていた。これらのイメージを払拭するために、二〇二一年の三月にリニューアル工事が進められた。新しいエントランスは対面での授業が全面的に再開したタイミングで公開され、見栄えも良く開放的で、かつ学生の学びを促進する実用性も兼ねた空間となった。

ところが、公開されたのちに一部の学生から次のような批判の声が上がってきた。「売店のおばちゃんはどこに行っちゃったんですか？」。

実は本学ではこの校舎棟のリニューアルの際、同時に食料品を扱っていた売店の契約を打ち切っていた。それにはこれまで売店として使われていたスペースを利用することでより開放的な空間にしようとする目的があり、代わりの機能としては食料品を販売する自動販売機を新たに設置していた。

しかし、学生たちにとっては売店の機能ではなく、そこで働く女性の従業員の方とのコミュニケーションの方が重要であったようである。朝大学に着いた時や、お昼、または授業の合間に取る「おばちゃん」とのコミュニケーションが、一部の学生たちにとっては大学生活を構成する重要な要素の一つになっていたのだった（実際に、ゼミ生等からはおばちゃんを慕う声を度々聞いていた）。このような利用者の声を事前に拾うことなく最後まで進んでしまった校舎棟エントランスのリニューアル企画は、学生からの不満の声が上がり、本学総務部にとっては苦い経験となった。それ以降、利用者の目線に立って施設の設計をしていくことの重要性が改めて認識されることとなったのである。そのため、二〇二三年四月にリニューアルを予定する食堂に関しては、「第一に学生の視点を取り入れること」が総務部のコンセンサスになっていた。

プロジェクトのプロセス

このような前提のもと、二〇二二年度の三年生ゼミで、五月から一ヶ月半程度の講義の時間を使って「新しい学食のデザイン」に取り組むこととなった。

このプロセスは、①観察・共感、②問題定義、③アイデア開発、④視覚化・プロトタイピング、⑤テストの五つのフェイズを通して行われた。これは所謂「デザイン思考

(design thinking)」と呼ばれるアプローチであり、利用者の視点からそこに必要なものを実装するためのデザイン方法である。筆者のゼミは新商品開発とデザインのゼミであるため、生活者視点からのアイデア開発の方法を課題解決に取り入れている。この点から、弊ゼミと総務部との連携プロジェクトが図られた経緯がある。ゼミ学生の多くが学食をほとんど利用していなかったこともあり、第三者の目線からプロジェクトに取り組むことができた。

一つ目の「観察・共感」のプロセスとして、ゼミ学生たちが数回に渡って学食を訪問し、観察を行った。普段学生たちがどのように学食を利用しているかを中心に、気づきをメモとしてできる限り収集した。

この観察を通して、まずはメニューが少ないことや週を跨いでメニューが変わらないといった食事サービスに関する課題が挙げられた。さらに、各チームの継続的な観察から、一日の利用者は五十人程度であること、しかもその多くは滞在時間が極端に短いということが浮かび上がってきた。多くの学生は昼時の最も混み合っている時間に短時間だけ利用し、次の授業の教室に移動する。そのためお昼時は利用者が混雑するが、それ以外の時間はほとんど誰もフロアを活用していないということが見えてきた。椅子の材質も硬く、長時間に渡って滞在したくなるような場所ではなかった。

また混雑時の光景を見た学生は、「学食は混んでいる」というイメージを入学当初から持っており、そのために一度も利用したことがないという意見がヒアリングからわかった。本学の食堂は教室のない上層階に位置しているため、混雑度合いを確認するには実際にそこまで行って確かめる必要性があり、また仕切りがあるせいでドアを開けなければ混み具合を確認できないようになっていた。このようなハードルもあり、学食の認識が長期間に渡って変わっていない学生がいることが明らかになった（写真1）。

二つ目の「問題定義」の段階では、観察の段階で得た気づきをまとめて問題状況を把握する収束的なプロセスをと

西洋文学
テーマ・モチーフ事典
ホルスト&イングリット・デムリヒ
川東雅樹 訳
いかなる主題が物語を駆動するのか。およそ1800名の作家、3500の文学作品を意味づけながら、160余りの文学テーマ・モチーフを詳説する。 13200円

新版
モンテーニュ逍遙
関根秀雄 著
人はいかに生き、いかに死すべきか。人生への豊かな気づきをもたらしてくれる『モンテーニュ随想録』へのいざない。いまという時代にこそ読まれるべき名著。
2420円

福田平八郎
人と言葉
田中修二 編著
自然の深奥をとらえ繊細で斬新な日本画を生みだした福田平八郎。丹念に描いた評伝と福田自身の文集により、その豊かな作品世界を探求する。 9460円

北川民次
メキシコから日本へ
名古屋市美術館
世田谷美術館
郡山市立美術館 編
革命期のメキシコで学び、帰国後は現実社会と真摯に対峙しつつ、新しい芸術のあり方を模索した比類なき画家の軌跡を多彩な側面からたどる。 3850円

国書刊行会
〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
TEL.03-5970-7421 FAX.03-5970-7427
https://www.kokusho.co.jp 【税込価】

った。観察を通して得た気づきのメモをチームで持ち寄って、そこから共通して浮かび上がってくる問題を、ディスカッションを通して整理した。その後各チームが整理した内容をクラスでシェアし、「真に解決すべき問題は何か」を議論した。結果として、一つ目のチームは利用者が行きたくなるような魅力的なメニューやサービスの開発を、二つ目のチームはピーク時の混雑の解消を、三つ目のチームはダウンタイム時の活用を、そして四つ目と五つ目のチームは、学食自体の魅力の開発と見える化という視点から課題を解決すべきであると結論づけた。

写真1　リニューアル前の旧学食の様子

三つ目の「アイデア開発」の段階では、各チームが定義した課題に対してどのような解決策があり得るかを考える発散的なプロセスをとった。ここではいわゆるブレインストーミングの手法を通して多くの解決策の可能性が生み出され、それらの方向性を整理していく中でいくつかのまとまったアイデア群にまとめられた。

最終的に提案されたアイデアの方向性は、週替わりメニューや期間限定メニュー、人気のないメニューのランキング投票と変更、バイキング形式のメニューといった、魅力のあるフードサービスに関するアイデアとして整理された。また、その運営の仕組みの面として、学生フードプランナー（新しいメニューの献立を考える）やフードサポーター（食堂でサービスを提供する）といった学生が食堂の運営に関わる試みや、新メニューや地域の飲食店と連携したメニューの試食会の定期的な開催が、さらに週替わりメニューを表示するサイネージの設置といったアイデアが整理された。

またピーク時の混雑の解消に関しては、食堂の混雑具合の見える化、ピーク時以外にも利用できる売店の導入、電子マネーの導入といったアイデアが整理された。これと合わせて、これまでの食堂のイメージからカフェのようなイメージの空間設計に変更することによる、ダウンタイム時の利用促進案が提案された。

四つ目の「視覚化・プロトタイピング」として、これらの解決策を視覚的に資料として表現し、総務部を交えたプレゼンテーションの形で共有した。資料には学生の考えたアイデアが視覚的に表現されており、導入する際のイメージの共有という役割を担っていた。この資料とプレゼンテーションをもとに総務部職員を交えて学食のリニューアルの方向性についてのディスカッションがなされた。

五つ目の「テスト」の段階は、ゼミ学生の手を離れて、総務部の職員が担うこととなった。ゼミ学生が学内フィールドワークを通して得た気づきと提案したアイデアは総務部の中で仮説として整理され、学生に対するアンケート調査という形で検証された。ゼミ学生が提案した内容はアンケートに答えた学生に対しても概ね好印象であることが検証され、その中でいくつかの実装可能なアイデアに収斂された。

このプロセスを経て得られた知見は設計会社や食堂サービスを提供・運営する業者とのブリーフィング資料に盛り込まれ、コンペティションと折衝を通して実現されていった。二〇二三年度の四月に新しい学食がオープンすることとなった。

写真2　リニューアルした学食

新しい学食

新しくオープンした学食には、これまで本学にはなかった多くのサービスが実現されている。

まず、食堂のメニューはこれまでの約二倍に増やすことができた。従来は曜日毎に献立が変わる仕組みで運営されていたが、同じ曜日であっても数種類のメニューから選ぶことができるように工夫され、利用者にとっての選択肢が大きく増えた。また週替わりでメニューも変更されることとなり、さらに従来は春と秋に一度ずつ提供する程度であった特別メニューも、月一回程度のイベントとして提供されることとなった。

また、食堂のサービスだけでなく、学食自体の空間設計にも大きな変更を行った。食堂の混雑具合の見えにくさを軽減するため、外からでも視認しやすいようにガラス張りのシームレスなデザインに変更がなされた。加えて天井のデザインをスケルトンに変更して高さを出したことで、開放的で入りやすい雰囲気をつくることができた。また毎日のメニューで何が提供されているのかがわかりやすいように、一階と五階のエントランスにデジタルサイネージが設置された。

さらに、従来の食事用のスペースに加え複数の新しいエリアがつくられた。少人数グループで作業をしながら飲食を楽しむテーブル席、飲食をしながらくだけた議論ができるソファラウンジ、グループで集中して話がしやすいボックスソファ席、個人での勉強やオンライン授業の受講をするための設備を取り入れた個人席など、さまざまな学びの

シーンに合わせたバリエーションがゾーニングされ導入されている。またちょっとしたワークショップやグループワークをすることのできるラーニングスペースも併設され、ゼミ等の少人数の講義で使用されている。

そして最後に、一度は廃止された売店が、復活することとなった。食堂が十一時から十四時までの食事提供であるのに対して、売店は十時から十五時までの時間で軽食と飲み物を提供しており、学生の食事時間以外での利用を促進している。実は前回のリニューアルの際の反省もあり、今回の業者選別のコンペティションでは、「食堂に加えて売店を運営できること」が条件として提示されていた。ゼミ学生からなされた総務部へのプレゼンテーションの中に、「軽食や飲み物の販売は勉強の邪魔にはならない。むしろ手助けする」という提言があった。この新しい学食における売店は、まさに学生たちの新たな活動を支える役割を担っている。

学食のデザインが生んだもの

新しい学食では、学生たちは昼食の時間に限定されずにさまざまな活動を行っている。オンライン授業や個人学習に取り組む学生もいれば、軽食をとりながらグループワークやサークル活動に取り組む学生もいる。単純に日々の話に花を咲かせている学生がいる一方で、上級生は就職活動の面接をしたりしている。これらの多様な学生の活動は、従来の本学の学食では見られなかった光景である（写真2）。

これからの学食に向けての具体的なアイデアを、筆者は特に持ち合わせてはいない。ただし、本プロジェクトの経験から言えることは、その大学にはその大学に合わせた学食の姿があるかもしれないということである。本学のような都心にある一方で敷地面積の小さな大学にとっては、学生が滞留することができる場所が少ないというデメリットもあるかもしれない。このような大学において、単なる食堂スペースとしてではなく、さまざまな学生活動を支援するスペースとして「学食」が生まれたのは、一つのあるべき姿なのかもしれない。

最後に、今回のプロジェクトは本学の総務部にも意識の変化を生んだようである。これまで施設のリニューアルした際には、「つくったものをそのままで綺麗に使ってもらいたい」という一方向的な意識が強くあった。しかし、今回のプロジェクトを経て、「つくったものを継続的に改善しながらより良いものに変えていく」という相互的反復的な場づくりの意識へと変わっていったという。実際に現在でもメニューや設備も含めて継続的に改善を重ねており、「新しい学食はどう?」と定期的に話を聞いて回るようにしている。その後も施設のリニューアルがなされたが、その都度利用者の視点を取り入れた視点は欠かさないようになった。このような変化は、本プロジェクトのもう一つの価値として位置付けることができるだろう。

大学出版部ニュース

表示価格は税込です

大学出版部協会・活動報告

四月一八日（木）一四時〇〇分～
　第六回　編集部会　開催※
四月一九日（金）一五時三〇分～
　第一〇回　理事会　開催※
　於：大阪大学出版会
　　及びオンライン開催
四月二六日（金）一三時三〇分～
　第一二回　営業部会　開催※
五月一七日（金）一三時三〇分～
　定時社員総会・理事会　開催※
　第一回　営業部会
　第一回　編集部会　開催
　春季懇親会　開催
　　於：日本出版クラブ
六月七日（金）一四時〇〇分～
　第二回　営業部会　開催※
六月一三日（木）一四時〇〇分～
　第二回　編集部会　開催※
六月二八日（金）一五時三〇分～
　第七回　理事会　開催※

（※　理事会・部会はＺＯＯＭでの開催）

北海道大学出版会

▼高橋英樹著**『サハリン島の植物』**（Ｂ５判・七九八頁・三〇八〇〇円）サハリン島における維管束植物の植物相（フロラ）研究のモノグラフ。自生植物一一八六種、分類に課題がある一八種を「検討種」として解説している。理学部・農学部のある大学や植物研究機関の図書館必備の基本資料。

▼宮澤安紀著**『日本とイギリスの自然葬法―現代社会における死の物語の再編』**（Ａ５判・二七六頁・七四八〇円）現代社会に生きる私たちはどのように死や死者と向き合うのか。日英における「自然葬法」の背景と実践について現地調査を実施しながら考察し、それぞれの社会における死の物語の特徴を抽出する。

▼田中佑実著**『死者のカルシッコ―フィンランドの樹木と人の人類学』**（四六判・二四四頁・六三八〇円）「死者の印」をもつ樹木、死者のカルシッコはフィンランドのサヴォ地方を中心にかつて盛んに作られた。風習が終わりつつある今、「エラマ（生）」をキーワードに、カルシッコとともに生きる家族の想いと暮らしを描く。

弘前大学出版会

▼弘前大学出版会編**『弘前大学レクチャーコレクション２　学びの扉をひらく』**（Ａ５判・二四四頁・一九八〇円）弘前大学の様々な学問分野の教員陣のレクチャー（講義）から厳選したレクチャーのダイジェスト集。前回の**『レクチャーコレクション　学びの世界へようこそ』**から四年の時を経て、執筆陣を新たにし、第二弾を刊行しました。

　研究という学びの入り口に立った大学一年生を主な読者対象とし、教員たちが、人生をかける程に、のめり込んでいる研究テーマについて、また、それと共に歩んできた人生の足跡（ストーリー）が語られています。これらのストーリーには読者がこれから遭遇する科学的、社会的現象に対してどうやってその正体を明らかにするか、それを理解するための新しい方式の編み出し方など、読者の未来を変えうるヒントが満載です。

東北大学出版会

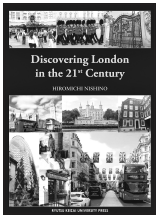
▼東北大学教養教育院編『**東北大学教養教育院叢書　大学と教養5　生死を考える**』（A5判・二一六頁・二七五〇円）多くの人間は、他者の死に遭遇することによりいずれ訪れる自己の死を意識し、「死とは何か」「死へ向けてどう生きるか」といった死生観を形成してきた。社会変化の荒波の中、現代人の死生観は多様化し個人化していく傾向にある。幅広い専門領域の研究者たちによる「生死」の在り方を考える論考集。

▼野村俊一・加藤諭・菅野智則編『**学都仙台の近代―高等教育機関とその建築**』（A5判・一二八頁・九九〇円）仙台市青葉区の東北大学片平キャンパスと川内キャンパスは、近代から現代まで様々な土地利用がなされてきた。管理主体や使用目的を変えながらも現在まで利用され続けている建造物の姿や、門戸開放の大学理念にもとづき地域社会と世界に開かれてきた場としての価値は、「学都」と呼ばれる仙台の大きな礎の一つと言える。豊富な文献資料と実物資料をもとに、両キャンパスを主とする営みの記憶をたどり将来を考える視座を提供する書。

流通経済大学出版会

▼植村秀樹著『**平和国家の戦争論―今こそクラウゼヴィッツ「戦争論」を読む**』（A5判・三六〇頁・四四〇〇円）戦後日本の平和主義を支えていたものは何か。本書は、日本がこれからも平和国家であり続けるための戦争論のすすめである。

▼西野博道著『Discovering London in the 21st Century』（A5判・一六八頁・一九八〇円）本書は、英国ロンドンの人気観光スポット30か所を取り上げ、その歴史的変遷、見どころ、最新情報をエッセイ風に解説、あるいは学術的、哲学的な考察を試み、英国文化の本質に迫ることを意図して執筆した英文書籍。



聖徳大学出版会

▼塩美佐枝・古川寿子・河合優子・重安智子・関口明子・井口厚子著『**教職実践演習―幼稚園教諭・保育士・保育教諭を目指すために**』（B5判・一七七頁・一七六〇円）今まで幼児教育に携わるために学んできたものが教諭・保育士・保育教諭の到達目標に照らして身についたかを確認できるように、いじめ・食育・特別支援・幼保小連携等幅広く載せ、自らの課題を自覚し、不足している知識・技能を補い定着できるようにまとめた一冊。

▼聖徳大学特別支援教育研究室編『**一人ひとりのニーズに応える保育と教育―みんなで進める特別支援［改訂3版］**』（A5判・二六七頁・一七六〇円）初学者のための特別支援教育本。コンパクトなハンディサイズに、全障害について、子どもの理解と指導・支援に必要な基礎的知識を盛り込んだ一冊。

▼聖徳大学児童学部児童学科編『**新しい児童学への招待**』（B5判・一〇三頁・一三五九円）幼児教育・保育・文化・心理の教授陣四〇名が協働制作した入門書。薄手の冊子に児童学の様々な素材が凝縮され学びやすい。

慶應義塾大学出版会

▼ターニャ・ラーマン著／柳澤田実訳『**リアル・メイキング**』（四六判・三二〇頁・三三〇〇円）なぜ人は目に見えない存在を「リアル」に感じるのか。ロンドンの魔術師から米国の福音派の「神」まで、気鋭の文化人類学者が解き明かす。

▼高橋義彦著『**ウィーン1938年　最後の日々**』（四六判・二八八頁・二九七〇円）ナチ・ドイツによる併合はどのように起こったのか？　芸術都市ウィーンの日常と文化が崩壊していく様子を、緊迫する政治的状況とともに描く。

▼C・J・エッカート著／松谷基和訳『**韓国軍事主義の起源―青年・朴正熙と日本陸軍**』（A5判・五一二頁・七二〇〇円）韓国近代化の起源を、朴正熙の完成させた軍国主義に見出し、その基礎がいかに日本統治期に築かれたのかを明らかにする。

▼大山耕輔著『**現代日本行政の比較分析**』（A5判・三〇四頁・価格未定）現代日本行政における信頼、環境、ガバナンスの三つの重要問題を、政府からの視点でなく市民の視点から国際比較のなかに位置づけ、定量的手法も加えて分析する。

専修大学出版局

▼牛山隆一著『**ASEAN多国籍企業の実像―後発勢力の国際化戦略と競争優位**』（A5判・二二四頁・三三〇〇円）ASEAN諸国を出自とする多国籍企業の「国際化戦略」と「競争優位」に関する分析に主眼を置き、グローバルな視野と切り口からその特徴を分析し、ASEAN経済の現状を見ていく。

▼引田梨菜著『**ネパール人学習者の日本語習得―音声を中心に**』（A5判・一三六頁・二八六〇円）ネパール出身の日本語学習者は、学習により会話能力や発音が大きく向上していくのに対し、試験成績は伸び悩む傾向がみられる。本書では、ネパール人学習者における日本語音声習得の特徴を明らかにし、日本語習得に向けた指導や教材の在り方を検討する。

▼小池隆生・兵頭淳史編／専修大学社会科学研究所社会科学研究叢書二六『**川崎の研究―産業・労働・くらしの諸相**』（A5判・二四八頁・三五二〇円）東京大都市圏を構成し、南北に長い市域の中に地域ごとの多様性をもつ都市である「川崎」を「産業・労働・くらし」、と対象を切り分け分析する。

玉川大学出版部

▼香川文代、デイヴィット・セルビー著『**教師のためのSDGsアクティビティー・ハンドブック**』（B5判・四〇二頁・四九五〇円）SDGsに関するさまざまな社会的課題について考えることができる95のアクティビティを紹介したハンドブック。持続可能な世界をめざすためのカリキュラム開発や教育制度改革に取り組む国際NGOが実際に行った授業をまとめている。SDGsについての授業を考えている教師必読の一冊。

▼工藤亘・藤平敦編著『**生徒・進路指導の理論と方法　第二版**』（A5判・二五四頁・二七五〇円）小中高の児童生徒を縦断的かつ横断的視点で捉え、つながり・接続・連携をキーワードに生徒指導のあり方を考える。児童生徒に直接的・具体的に働きかける「指導」と双方向的やりとりで支援する「支援」の両輪での実践を提案する。改訂された「生徒指導提要」に対応。

中央大学出版部

▼斎藤孝著『**「憲法上の権利」の体系**』（A5判・三二八頁・四四〇〇円）憲法により国民に保障された「権利」について、権利の規範構造論（担い手、名宛人、対象）を手がかりに体系的に論じる。本書は「権利」を「固有の権利」・「権能」・「権能への権利」に三分することを前提として論述する。

▼渡邉浩司編箸『**幻想的存在の東西**』（A5判・五五六頁・六七一〇円）ユーラシア大陸の東西に見つかる「幻想的存在」の諸相に学際的な視点から迫った論文集。第一部と第二部では日欧の神話、第三部と第四部では中世から近現代までの文学、第五部ではヨーロッパのフォークロアに焦点を当て論及する。

▼李廷江編箸『**日本と中国―歴史と現代**』（A5判・二九二頁・三六三〇円）日本と中国は永遠の隣国、一八九四年に勃発した日清戦争以降の一三〇年間には戦争・平和・共生を特徴づける波乱万丈な歳月を経験。日中両国の学者は、斬新的、多面的な視点より歴史と現代について新資料を駆使し考察した一冊。

東京大学出版会

▼田中亘著『**企業法学の方法**』（A5判・四二四頁・五五〇〇円）「法と経済学」からのアプローチをもとに、効率性を基準とした斬新な理論を展開する田中会社法の真骨頂に迫る。著者による教科書『**会社法**』をより深く読み解くために。

▼保坂亨著『**学校と日本社会と「休むこと」―「不登校問題」から「働き方改革」まで**』（四六判・二八八頁・三一九〇円）学校に行かないのは問題？　身体を壊しても部活動に打ち込むのは美しい？　教育現場や社会を取り巻く「皆勤」の空気と、ワークライフバランスを考える。

▼正木郁太郎著『**感謝と称賛―人と組織をつなぐ関係性の科学**』（A5判・二八〇頁・三五二〇円）「ありがとう」と「すごい」は仕事で大事？　組織改善・職場環境向上・新入社員定着などのマネジメントに活かせるヒントが満載！

▼歴史学研究会編『**日本復帰50年―琉球沖縄史の現在地**』（A5判・二七二頁・三九六〇円）沖縄と対話しつつ発展した歴史学の到達点と日本復帰の意味を新たな視点から問い直す。

東京電機大学出版局

▼デビッド・アダミー著／河東晴子・小林正明・徳丸義博訳『**電子戦の技術―宇宙の電子戦編**』（A5判・二四八頁・四七三〇円）宇宙空間の活用が国の繁栄にとって不可欠となっている。衛星の打ち上げは今後ますます増え、民間および軍事双方の活動にとって重要な衛星が多数存在している。一方、その多くが現在進行形で電子攻撃を受け続けており、日常生活に多大な影響を及ぼす危険性も同じく増えている。

　本書は電子戦と衛星という二つの分野の交差部分を取り上げたものである。電子戦の基礎となる面三角法、軌道力学、および電波伝搬について詳しく解説し、妨害信号を傍受・防護するために必要なことを具体的に解説している。

　また、電子戦の専門家であっても衛星のことをあまり知らない人や、衛星の専門家であっても電子戦のことをよく知らない人にも役に立つことを期待して書かれている。さらに、どちらの分野にも詳しくないという人にとっても役立つように工夫されている。宇宙空間の平和利用に欠かすことのできない技術書である。

法政大学出版局

▼新村拓著『**北里柴三郎と感染症の時代―ハンセン病、ペスト、インフルエンザを中心に**』（四六判・二八二頁・三五二〇円）新千円札の顔・北里の事績を未公開資料をもとに綴る、医療社会史の労作。

▼H・ダンナー著／山﨑高哉監訳『**解釈学入門**』（四六判・二二〇頁・二九七〇円）理解、意味、翻訳とは何か。二〇世紀哲学に至る学問的技法の本質を初心者にも分かりやすく記述した格好の導入書。

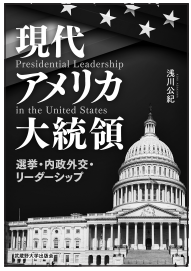
▼高榮蘭著『**出版帝国の戦争―不逞なものたちの文化史**』（四六判・三六二頁・三五二〇円）植民地の読者をも積極的に包摂しようとした帝国日本の出版市場。抑圧と抵抗だけではない動きに着目する。

▼N・ブレナー著／林真人監訳『**新しい都市空間―都市理論とスケール問題**』（A5判・五二〇頁・五一七〇円）リスケーリング論や惑星的都市化論で、いま最も影響力のある都市研究者の代表作。

▼M・ジェイ著／亀井大輔ほか訳『**うつむく眼―二〇世紀フランス思想における視覚の失墜**』（四六判・七九八頁・七二六〇円）視覚中心主義を問いに付す圧倒的思想史にして記念碑的大著。新装復刊。

武蔵野大学出版会

▼浅川公紀著『**現代アメリカ大統領**』（A5判・三〇四頁・三三〇〇円）大統領選挙の仕組みから今後の課題まで、現代の米大統領に関する広汎な事項を扱う。大統領の動きを追うことで、過去を振り返り未来を見据える手掛かりとなる。



▼樋口範雄編『**しあわせの高齢者学2**』（四六判・三〇四頁・一九八〇円）武蔵野大学で開催された「古稀式」の講演録を中心に解説。式の内容だけでなく、その意義や高齢者学を取り巻く諸課題についても、理解を深めることができる。

武蔵野美術大学出版局

▼大坪圭輔著『**美術の教育―多様で寛容な「私」であるために**』（A5判・二四〇頁・二九七〇円）多文化共生へと進む現代社会において、学校教育における「美術」への期待度は年々高まっている。一方で「美術が苦手な人」は常に存在している。その美術に対する不信感、苦手意識の背景についての理解や、芸術文化を取り巻く様々な状況の多角的な考察を通して、これからの社会における美術とその教育の意味を考える。長年にわたり美術教育と美術科教員養成の現場に立ち続けてきた著者による、「美術の教育」をめぐる未来への提言。

▼志田陽子著『**表現者のための憲法入門 第二版**』（A5判・三〇四頁・二八六〇円）日本国憲法の入門書。表現者が集まって建国した仮想国家「アートランド」を舞台に「国家と国民の関係」をわかりやすく描出。誰もが表現者となれる時代であり、なおかつ高度化する情報社会を生き抜くために、憲法は一人ひとりの人生や社会にとってどのような意味を持つのか。重要な裁判例一七本、魅力的なコラム一八本を収録。

早稲田大学出版部

▼甲斐伊織著『**大村はま国語教室の単元学習―学習経験の蓄積と構造**』（A5判・二七〇頁・四四〇〇円）単元学習の実践者として広く知られる大村はま。大村国語教室における学習経験の蓄積を復元・考察し、主体的な言語活動を成立させる要素や単元相互の関連、及び個々の単元が果たす役割について考察する。

▼渡邉義浩訳『**後漢書 志［二］**』（早稲田文庫・六八四頁・一六五〇円）大好評シリーズ第四巻。前巻に引き続き、制度史に当たる「志」を取り上げる。「天人相関説」による自然哲学、地方行政制度、官制・職制、宮中での乗りものと装束に関する礼制など、後漢帝国一九六年間を読みとく視角がここにある。

▼寺﨑新一郎著『**グローバル社会の消費者心理―カントリー・バイアスから読む〈こころ〉**』（早稲田新書・一九六頁・九九〇円）日本企業がいかに世界の人々の〈こころ〉をつかみ、自国製品・サービスの海外進出を促進するか。『多文化社会の消費者認知構造』で数々の学会賞を受賞した気鋭の研究者が、ビジネスパーソン向けにわかりやすく書き下ろし。

関東学院大学出版会

▼楠木紀男・規矩大義編著『**建築と土木の耐震設計・基礎編―性能設計に向けて**』（B5判・一九二頁・二八六〇円）近年、建築や土木の構造物の耐震設計は急速に高度化し、発展している。本書は応用編に先立ち、構造物が建設される敷地に関わる分野、構造物の挙動を解析する分野、地震とは異なるもう一つの外乱を紹介する耐風工学分野という大きく三つの分野から構成されている基礎編である。多彩な内容によって耐震設計に必要な基礎知識を幅広く得られる一方、各章は独立しており、読者は必要に応じて、どの章からでも読み始めることが出来るように構成されている。〈目次〉はじめに／第一章　地震工学入門―地震の基礎知識／第二章　地形・地盤の捉え方／第三章　地盤工学入門／第四章　フレームの弾塑性解析入門―限界状態設計法の基礎として／第五章　構造振動学の基礎／第六章　耐風工学入門

名古屋大学出版会

▼古松崇志著『**ユーラシア東方の多極共存時代―大モンゴル以前**』（A5判・八三六頁・一四三〇〇円）遊牧王朝と中国王朝はなぜ数百年間も併存できたのか。契丹・金・宋を軸とする国際関係を解明し、東洋史・中国史像を刷新する。

▼高畑幸著『**在日フィリピン人社会―1980～2020年代の結婚移民と日系人**』（A5判・三二六頁・六三八〇円）繁華街から介護の現場まで、幅広い領域で存在感を示すフィリピン人の暮らしと語りに密着、全体像を描き出す。

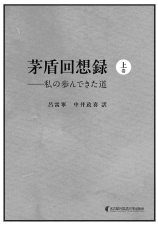
▼R・ハルワニ著／江口聡・岡本慎平監訳『**愛・セックス・結婚の哲学**』（A5判・五七二頁・六九三〇円）フェミニズムやジェンダー論に収斂しない豊かな洞察。恋愛・セックス・結婚と、相互の関係性を、根底から問い直す、最良の入門書。

▼周俊著『**中国共産党の神経系―情報システムの起源・構造・機能**』（A5判・四七八頁・六九三〇円）秘密主義のベールを乗り越え、一党支配下の情報制度とそれに基づく政策決定の様相を解明、中国政治の捉え方を一新する。

名古屋外国語大学出版会

▼今泉景子著『**ホスピタリティを磨く20のレッスン**』（A5判・一三六頁・一七六〇円）空港勤務経験のある元グランスタッフで今は大学で教える著者が、実際に仕事で学んだこと、体験談などを紹介しながらレッスン形式でまとめた実践の書。

▼呂雷寧・中井政喜訳『**茅盾回想録―私の歩んできた道**』（A5判・上巻五八八頁、下巻六〇六頁・共に四九五〇円）魯迅とともに近代文学を牽引した、近代中国の大作家・茅盾の自伝。混沌の時代と戦い続けながら数々の優れた小説、評論、エッセイを遺し、翻訳、編集などに邁進した茅盾。この卓越した文人の詳細な記録でもある第一級資料が、初めて日本語に訳された。貴重な写真、家系図、詳細な訳者注、解説、年表、地図なども収録。上巻は一八九七年～一九三四年、下巻は一九四九年まで。



京都大学学術出版会

▼アリストパネス著／戸部順一訳『**喜劇全集1**』（四六判変型・五六四頁・四九五〇円）ギリシア喜劇を代表する詩人の現存作品からなる全集。詳細な訳註と解説で、笑いの勘どころを逃さない。全3冊。『**西洋古典叢書**』2023最終回配本。2024＝リウィウス『**ローマ建国以来の歴史7**』、スタティウス『**テーバイ物語**』、エピクロス『**自然について 他**』

▼京都大学大学院人間・環境学研究科編『**学問で平和はつくれるか?**』（A5判・三三六頁・三〇八〇円）緊迫する世界情勢。世界はこういうものと語る〈わけ知り顔のリアリズム〉のただなかで、新しい平和学を、宇宙物理学から微生物学に至るあらゆる学問を素地とするものとして構想する。

▼高橋宏司著『**ヒト心あれば魚心―釣られた魚は忘れない**』（四六判・二六四頁・二四二〇円）仲間を真似て餌にありつくアジ、危険を覚えて身を隠すヒラメ、釣りの仕掛けを回避するタイ。工夫をこらした実験と行動観察から、身近な魚の心の中を覗く、魚類心理学への招待。《**新・動物記**》

大阪大学出版会

▼田中慎吾・高橋慶吉・山口航著『**アメリカ大統領図書館―歴史的変遷と活用ガイド**』（A5判・二七二頁・三三〇〇円）アメリカ大統領図書館の全貌を明らかにした本邦初の歴史書兼リサーチガイド。大統領図書館の誕生から現在に至る歴史を解説し、大統領図書館で資料調査を円滑に行う際に必要な情報も網羅的に提供。

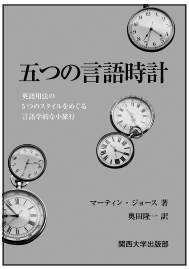
▼赤阪辰太郎著『**サルトル　風通しのよい哲学**』（A5判・二五二頁・四九五〇円）サルトルの前期思想における存在論を、形而上学をキーワードに再検討する。サルトル自身の人生と照合しながら「風通しの良い存在論」という視点を提示。

▼倉光成紀・増井良治・中川紀子著『**生命科学が変わる!―タンパク質の構造・機能の基礎から研究テーマ例まで**』（B5判・二六二頁・三三〇〇円）生命科学を理解する上で役立つ一般法則を、主にタンパク質の立体構造と機能について収集することを試みた意欲的な一冊。学生が優れた研究を引き継いでいくために、理学的視点からコンパクトに示す。

関西大学出版部

▼蜷川順子、メルテム・オズカン・アルトゥノズ、吉田雄介共著『**領域のフレーミング―風景が生まれるところ**』（A5判・四〇二頁・四九五〇円）風景表象の成立に関して、対象を美的に評価、判断する認識とともに、それに囲まれた領域を得たいという願望が生じる。このような観点から、西洋近代の風景画、トルコの近代絵画、イランの絵画絨毯などの風景表象を捉え直す試み。

▼マーティン・ジョース著／奥田隆一訳『**五つの言語時計―英語用法の5つのスタイルをめぐる言語学的な小旅行**』（A5判上製・一一八頁・二二〇〇円）堅苦しい表現、くだけた表現などの英語表現を5つのスタイルに分類し、その用法の背後にある要素を社会言語学的に解明した。英語表現に関心のある人にとっての必読書を翻訳。



関西学院大学出版会

▼ハワード・デイビス、スティーブ・マーティン編著／石原俊彦・大林小織監訳『**英国労働党の公検査政策**』（A5判・二一八頁・六八二〇円）より多くの国民や住民が財政の現状を正しく理解し、民意のもとで財政をコントロールするために、英国労働党のもとで実践された公検査制度に注目し学ぶための基本書。

▼柴田学著『**地域福祉実践としての経済活動―コミュニティワークの新たなアプローチ**』（A5判・一九二頁・三九六〇円）地域福祉と地域創生が抱える課題は、地域社会に複合的に生じる関連した事象である。社会経済型地域福祉と自治体ガバナンス型地域福祉を両輪とし、地域福祉による新しい価値の創造を試みる。

▼中野順哉著『**器―幻想と復讐**』（四六判・一七六頁・二〇九〇円）可動式日本間「器」（UTSUWA）。開発者の建築家・内田利惠子氏や、製作に関わった職人たちへのインタビューから導き出したキーワードをもとに、「器」を舞台とする戯曲を創造する。

九州大学出版会

▼今里悟之著『**長崎平戸の宗教地誌―キリシタン・カトリック・在来信仰**』（A5判・二九八頁・五九四〇円）信仰の複雑な歴史と多様な姿を地理学から解きほぐし、日本宗教の特質を考える。

▼橋本栄莉著『**タマリンドの木に集う難民たち―南スーダン紛争後社会の民族誌**』（A5判・三二四頁・六六〇〇円）難民キャンプの暮らしから見えてくる「難民の世紀」における新しい民族誌。

▼世利洋介著『**分権国家スイスの制度改革―連邦・州政府の役割分担と財政調整**』（A5判・二五〇頁・五九四〇円）連邦活性化のための国家プロジェクトNFAの制度設計と初期効果を解説する。

▼片瀬葉香編著『**人新世とツーリズム―地球とツーリズムの未来を考える**』（A5判・一七八頁・四九五〇円）人新世という時代に我々はいかに生活し、地球システムをいかに維持していくべきかを問う。

▼岡本剛著『**焚き火の脳科学―ヒトはなぜ焚き火にハマるのか**』（四六判・二四八頁・一七六〇円）焚き火をすると人はどうなる？　焚き火の魅力にとりつかれた脳科学者が、脳科学で焚き火に迫る。

大同印刷㈱	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20 TEL 0952-71-8550 https://www.daidou-jp.com
ダイニック㈱	〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 新御成門ビル TEL 03-5402-1811 https://www.dynic.co.jp
㈱太平印刷社	〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16 TEL 03-3474-2821 http://www.p-taihei.co.jp
㈱太洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1 TEL 058-324-2111 https://www.p-taiyosha.co.jp
㈱竹尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6 TEL 03-3292-3617 https://www.takeo.co.jp
㈱東京出版サービスセンター	〒110-0016 東京都台東区台東1-33-6 セントオフィス秋葉原401 TEL 03-5688-5801 https://www.c-enter.com/
㈱とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座7-13-12 サクセス銀座7ビル4F TEL 03-5148-7200 https://www.toko-ai.com
東光整版印刷㈱	〒135-0006 東京都江東区常磐2-12-15 TEL 03-3632-0801
㈱トーヨー企画	〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7 TEL 075-411-8288 https://www.talligent.jp
㈱日新広告社	〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F TEL 03-3263-9431 http://www.nissinkoukokusya.com
㈱日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7 TEL 03-6256-7528 https://www.nikkei.co.jp
日本宣伝販売㈱	〒330-0856 埼玉県さいたま市大宮区三橋3-278 TEL 048-620-1021 http://www.nihon-senden.jp
㈱博報堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F TEL 03-6441-6711 https://www.hakuhodo.co.jp
藤原印刷㈱	〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5 TEL 03-3291-0191 https://www.fujiwara-i.com
㈱平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7 TEL 03-3944-0301 http://www.heibun.co.jp
㈱毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 TEL 03-3212-3340 https://www.mainichi.co.jp
誠製本㈱	〒175-0081 東京都板橋区新河岸3-13-1 TEL 03-4212-2735 http://www.makoto-seihon.com
㈱遊文舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31 TEL 06-6304-9325 http://www.yubun.co.jp
㈱読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1 TEL 03-3242-1111 https://www.yomiuri.co.jp

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援くださる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同くださり、ご支援いただいている各社様をご紹介します。

一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

㈱朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2 TEL 03-5540-7749 https://www.asahi.com	
亜細亜印刷㈱	〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154 TEL 026-243-4858 http://www.asia-p.co.jp	
㈱アベル社	〒102-0071 東京都千代田区富士見2-2-2 東京三和ビル301 TEL 03-6256-8133 https://www.abel-sha.com	
尼崎印刷㈱	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20 TEL 06-6494-1122 http://www.amain.co.jp	
英文校正エナゴ	〒101-0021 東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F クリムゾンインタラクティブジャパン https://www.enago.jp/	
㈱ALE	〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階 TEL 03-5652-8627 http://www.adv-logi-eng.co.jp	
王子製紙㈱	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5 TEL 03-3563-7072 https://www.ojipaper.co.jp	
㈱加藤文明社印刷所	〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-15-6 K-STAGE TEL 03-3261-8281 http://www.bunmeisha.co.jp	
城島印刷㈱	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6 TEL 092-531-7102 https://www.kijima-p.co.jp	
㈱粂川印刷	〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7 TEL 03-3943-9811 http://www.kumekawa.jp	
港北メディアサービス㈱	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7 TEL 03-5466-2201 http://www.kohoku.co.jp	
㈱コングレ・グローバルコミュニケーションズ	〒103-0027 東京都中央区日本橋3-10-5 オンワードパークビルディング5階 TEL 03-3510-3750 https://www.congre-gc.co.jp	
三美印刷㈱	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里6-28-1 TEL 03-6807-8377 https://www.sanbi.co.jp	
三立工芸㈱	〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F TEL 03-3261-5171 https://www.sanritsu-net.co.jp	
三和印刷㈱	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井1822-1 TEL 026-285-2300 http://www.sanwaprinting.jp	
信濃印刷㈱	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11 TEL 03-3237-3601 http://www.shinano-insatsu.co.jp	
㈱渋谷文泉閣	〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7 TEL 026-244-7185 http://www.bunsenkaku.co.jp	
㈱眞興社	〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町19-2 TEL 03-3462-1181 https://www.shinkousha.co.jp	
新日本印刷㈱	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342 TEL 03-3269-3611 https://www.sinnihon.net	
㈱精興社	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-9 TEL 03-3293-3021 https://www.seikosha-p.co.jp	
創栄図書印刷㈱	〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766 TEL 075-255-2288 https://www.soei-pb.co.jp	

2024年4月～2024年7月新刊

政党政治家と近代日本
—前田米蔵の軌跡

古川隆久 著
四六判上製 404 頁 定価 4,950 円
ISBN:978-4-409-52092-5

原敬の政党政治に影響を受けた、保守系の政党政治家・前田米蔵はなぜ戦時協力をしたのか？彼は独裁軍部の単なる茶坊主であったのだろうか？戦後自民党の保守合同のさきがけともなった前田の初の本格的研究。日本政治史のなかで、前田はいかなる歴史的意味をもったのかを問う。

マリア＝テレジア
（上・下 二分冊）

B・シュトルベルク＝リーリンガー 著
山下泰生／伊藤惟／根本峻瑠 訳
A5判上製平均 450 頁
定価各 8,250 円
上：ISBN:978-4-409-51101-5
下：ISBN:978-4-409-51102-2

第一人者による圧巻の評伝。

セクシュアリティの性売買
—世界に広がる女性搾取

キャスリン・バリー 著
井上太一 訳 著
四六判並製 420 頁 定価 5,500 円
ISBN:978-4-409-24161-5

搾取と暴力にまみれた性売買の実態を国際規模の調査で明らかにし、その背後にあるメカニズムを父権的権力の問題として理論的に抉り出す。

神道・天皇・大嘗祭

斎藤英喜 著
四六判上製 510 頁 定価 7,150 円
ISBN:978-4-409-54088-6

神々と天皇、国家と宗教が絡み合う異形の姿。大嘗祭の起源から現代までと、それを巡る論争と思想を描き出す、空前のスケールで歴史の深みへと導く渾身の大作。圧倒の 1200 枚、ここに誕生。

戦後期渡米芸能人のメディア史
—ナンシー梅木とその時代

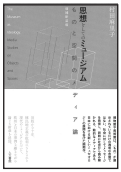
大場吾郎著
四六判並製 420 頁 定価 5,280 円
ISBN:978-4-409-24160-8

日本とアメリカにおいて音楽、映画、舞台、テレビなど、ジャンルとメディアをまたいで活躍し、日本人女優で初のアカデミー受賞者となったナンシー梅木の知られざる生涯を初めて丹念に描き出す労作。

人種の母胎
—性と植民地問題からみる
フランスにおけるナシオンの系譜

エルザ・ドルラン 著
ファヨル入江容子 訳
四六判上製 412 頁 定価 5,500 円
ISBN:978-4-409-04127-7

性的差異の概念化が、いかにして植民地における人種化の理論的な鋳型となり、支配を継続させる根本原理へと変貌をしたのか。



思想としてのミュージアム（増補新装版）
—ものと空間のメディア論

村田麻里子 著
四六判並製 330 頁 定価 4,180 円
ISBN:978-4-409-24163-9

旧版から十年、植民地主義の批判にさらされる現代のミュージアムについて、欧州と日本の事例を繙きながら論じる新章を追加。

21 世紀の自然哲学へ

近藤和敬／檜垣立哉 編
四六判上製 384 頁 定価 5,500 円
ISBN:978-4-409-03132-2

元素、大気、大地、菌類から人間までをも貫く哲学は可能か。惑星規模の気候変動と資本主義の加速によって人間と環境の関係が揺らいでいる。地球が沸騰するいま、哲学は何を思考し、どう変わりえるのか。気鋭たちによる熱気みなぎる挑戦。

人文書院 〒612-8447 京都市伏見区竹田西内畑町９ X @jimbunshoin（税込）
TEL075-603-1344 FAX075-603-1814 https://www.jimbunshoin.co.jp/

一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覧

◉北海道大学出版会
〒060-0809 札幌市北区北 9 条西 8 丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308　FAX 011-736-8605

◉弘前大学出版会
〒036-8560 弘前市文京町 1 番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168　FAX 0172-39-3171

◉東北大学出版会
〒980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777　FAX 022-214-2778

◉流通経済大学出版会
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑 120
TEL 0297-60-1167　FAX 0297-60-1165

◉聖徳大学出版会
〒271-8555 松戸市岩瀬 550
TEL 047-365-1111　FAX 047-363-1401

◉慶應義塾大学出版会
〒108-8346 港区三田 2-19-30
TEL 03-3451-3168　FAX 03-3451-3124

◉専修大学出版局
〒101-0051 千代田区神田神保町 3-10-3
TEL 03-3263-4230　FAX 03-3263-4288

◉玉川大学出版部
〒194-8610 町田市玉川学園 6-1-1
TEL 042-739-8935　FAX 042-739-8940

◉中央大学出版部
〒192-0393 八王子市東中野 742-1
TEL 042-674-2351　FAX 042-674-2354

◉東京大学出版会
〒153-0041 目黒区駒場 4-5-29
TEL 03-6407-1069　FAX 03-6407-1991

◉東京電機大学出版局
〒120-8551 足立区千住旭町 5 番
TEL 03-5284-5385　FAX 03-5284-5387

◉法政大学出版局
〒102-0073 千代田区九段北 3-2-3
法政大学九段校舎内
TEL 03-5214-5540　FAX 03-5214-5542

◉武蔵野大学出版会
〒202-8585 西東京市新町 1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003　FAX 042-468-3004

◉武蔵野美術大学出版局
〒187-8505 小平市小川町 1-736
TEL 042-342-5515　FAX 042-342-9542

◉早稲田大学出版部
〒169-0051 新宿区西早稲田 1-9-12
TEL 03-3203-1551　FAX 03-3207-0406

◉関東学院大学出版会
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東 1-50-1
TEL 045-786-5906　FAX 045-785-9572

◉名古屋大学出版会
〒464-0814 名古屋市千種区不老町 1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027　FAX 052-781-0697

◉名古屋外国語大学出版会
〒470-0197 日進市岩崎町竹ノ山 57
名古屋外国語大学内
TEL 0561-75-2503　FAX 0561-75-1723

◉京都大学学術出版会
〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町 69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182　FAX 075-761-6190

◉大阪大学出版会
〒565-0871 吹田市山田丘 2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614　FAX 06-6877-1617

◉関西大学出版部
〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35
TEL 06-6368-0238　FAX 06-6389-5162

◉関西学院大学出版会
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町 1-155
TEL 0798-53-7002　FAX 0798-53-5870

◉九州大学出版会
〒819-0385 福岡市西区元岡 744
九州大学パブリック 4 号館 302 号室
TEL 092-836-8256　FAX 092-836-8236

◉大阪経済法科大学出版部（休会）
〒581-8511 八尾市楽音寺 6-10
TEL 072-941-9129　FAX 072-941-9979

大学出版 139 号（2024年夏）

2024年8月1日発行
頒価 100円（〒共）

［発行所］
一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替 00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北1丁目14番13号
メゾン萬六403号室
TEL 03-3511-2091 FAX 03-3511-2092
E-mail：mail@ajup-net.com
URL：https://www.ajup-net.com/

［表紙デザイン］奥定泰之

［表紙写真］
ダイニングラボ・食堂コマニ
（東京大学 駒場IIキャンパス）
［写真撮影 木内和美］

＊本誌のバックナンバーは、大学出版部協会の公式HPでも、PDF版を全文無料でダウンロードできます